

(カナダの家庭支援・解説)

## 1.子育て支援と家庭支援

ファミリーセンタード(家族指向) & ラップアラウンド(地域全体を支援)

日本は子ども中心、子どもの健やかな成長に注目しがち。しかし、カナダでは子どもと家庭、地域を切っても切れない関係と認識し、その全体に支援を行う。

「日本は子どもが健やかに育つためには、どう子育てをしたらいいかという観点で、親にこうしようね、ああしようねという指導をしがち。しかし子どもと家庭は切っても切れないものだから、子どもをよく育てようと思ったら、家族まるごと支援しなきゃしょうがないんじゃないかという考え方をカナダではする。例えば食育をしたいというのであれば、お母さんを集めて食育の講座をするよりも、なぜ食が乱れているのか、丁寧にみていくというふうに、**ちょっと日本とは違う。子どもと家庭を包むのは地域という考えがあって、家庭を応援しようとする人はすなわち地域を応援しなきゃしょうがないだろうという考え方をする。地域が元気になることイコール子育て支援という考え方が主流。**」

## 2.家庭支援の実際

### オーダーメイドで包括的な支援

「カナダではまず個人の人権が、家族、地域、国の権利より優先されるが、日本ではそれらの権利の後に個人の人権が来る。そしてそのような「常識」が、対照的な2国の支援システムに反映されている」(メアリー・トーマス)

「親のひとりひとりには、最良の判断を下せるだけの内的な力が本来宿っている。それを信じるなら、**親を支援するとは、親のニーズを整理し明確にする手助け、そして情報の入手方法の手助けである。支援することで親をエンパワーするのだ。**」(パット・ファノン)

「次は**オーダーメイドの支援**。お母さんとか家庭とかまとめて言うけど、実はひとりひとり。赤ちゃんだってひとりひとり違うんだから、**20年30年生きてきたお父さんお母さんはひとりひとり違うのは当たり前で、それぞれに合った支援の届け方をしよう**と考える。成人教育というのは、**双方向ディスカッションや交流会のようなスタイルが多い。**」

### ドロップイン

日本のつどいの広場原型。中心的事業。ノンプログラム、予約なしでふらっと訪れることのできる場所。

「ドロップインというのは、日本では、つどいの広場として広がっているもの。行って何をするわけじゃないんだけど、居場所になっていて、親子が集って遊べる所、大事なものはコーディネーターの存在。つまり**行って遊べる場所を用意するだけでなく、孤立したり友達ができなかつたりするような人を何気なくうまいこと誘って輪に入れたり、心配事がある人の相談にのったり、のりきれない時は専門家に相談したり、そういうコーディネーターをする人がスタッフとして常駐している事が大事だ**ということ。」

## 親教育

様々な種類がある。ほとんど、成人教育の手法（少人数、双方向コミュニケーション）で行われる。

「親支援プログラム、日本だと NP だけ有名になっているが、ものすごくたくさんプログラムがある。親をすることの教育だけでなく、家庭を作るためにとか性教育とか、子どもがいなくなった後の空の巣症候群の対応とか、お年寄りになった時のとか、その時その人に合わせて実施されている」

## レスパイトサービス

無料一時利用託児。レスパイトというのは、誰かの世話をしている人が、一時的にその世話を他の人に頼んで休息を取るといったような意味。

「レスパイト託児、日本ではあまり歓迎されないことが多いのが本音の現状ではないか？誰かを世話している人は、一時的に休息する権利があるという考え方。誰かというのは全体としては、お年寄り、寝たきり老人、障害を持つ子も含めてですが、子育て支援においては、小さい子の世話をしている人は時々息抜きのために小さい子を預けるべきであるという考え方で、無料で提供している支援センターも非常に多く日本とは比べ物にならない。」

## アウトリーチ

施設から出向いての個別訪問、勧誘サービス。

社会サービスは、必要な人が申請して初めて得るのでなく、サービスの送り手が確実に必要な人に届けなくてはならない、という考え方が、このサービスの底流にある。

「日本だと社会サービスはみんなにまんべんなく知らせるから OK、この広場の事も広報にのせたから、ポスターにのせたから、チラシまいたから OK という感じですが、そうじゃなくて、もしこの事業を届けたい人がいたら、どうしたら目に付くか考えるわけです。広報は見ないだろう、じゃあどうすれば目につくだろう、行く気になるだろうと考えて、あそこなら行くかもしれない、直接訪ねて行って、誘えば来るかもしれないと、福祉サービスをこちらから持っていくという考え方です。」

## ホームビジット

子育ての先輩による新生児訪問。研修を受けた一般の母親で、同じ文化的背景や条件（同じ障害を持つ子の親など）の人が、新しく母親になった人を訪れる。

「日本の新生児訪問指導と同じようなものですが、日本の場合は保健師や助産師が訪ねて行くんですが、そうではなくて、同じお母さんが研修を受けて行くんです。カナダは移民の国なので、インド移民の所にはインド移民の先輩お母さんが、北ヨーロッパ移民の人だったら北ヨーロッパのというように、同じ文化背景を持つ人、言語が通じる人が行く。」

## コーディネート

心理的な問題解決や社会福祉的対応などが必要な場合は、そのようなサービスにつなぐ。恒常的にパンフレットなども置いている。

「普通の相談事業もやっている。これがおもしろい。事例をひとつ。障害児を産んだお母さんと障害児教育のコーディネーターが相談活動をしていたので、療育の相談かと思ったんです。そうしたら、あの親が今面談をしているのは、障害を持つ子を産んだ罪悪感とか不安を取り除くための面談だった。なるほど相談といってもいろいろあると思った事例。情報提供という意味では、本当に様々な情報が支援センターに行ったら手に入るようになっているらしい。スタッフはその土地の福祉サービスが全部網羅された本を1冊持っていて、自分達の手に負えない時は繋げる事をします。コーディネートというのは、自分達のサービス以外の所とも繋げる役目も持ちます」

## ソーシャルワーク

当事者の環境を広く眺めて、関係者や関係状況を視野に入れた、総括的な支援をする。

「ソーシャルワークというのは、その人がもし子育ての悩みを相談してきた時に、その人の背景、実はだんなと仲が悪いんじゃないだろうかとか、姑さんとはどうなんだろうとか、金銭的には困っていないかとか、大きな視野で見えて支援を提供するという事です。」

## アドボカシー

社会や地域に対する当事者理解の呼びかけ。代弁活動。

「アドボカシーというのは、子育て支援は最中のお母さんに向かうんですが、そうではなくて子育て最中のお母さん以外の人達に、今の子育てはどういう状況にあるか説明したり、少子化対策にさかっている事をやっている人達にそうじゃないよと抵抗したり、お母さんの代わりに世間とやりとりするという感じの事をします。」

### 3. 支援の理念や手法について

これらの手法の多くは、正確には、カナダの、というよりFRP（ファミリーリソースプログラムスカナダ協会）のものである。なお、これらの理念・手法は、きれい事ではなく「そのほうが効果的だから」という合理的な理由で採用されている。

#### 届くところの平等

提供する時点で、平等に開かれていても肩手落ちである。様々なニーズにそれぞれ対応して届かなければ、社会サービスとはいえない、という考え方。

「届く所の平等一出す所で平等でなく、サービスの送り手が、確実に、必要な人に必要なことを届けようという考え方。必要がなければ過剰サービスはしない。それが本当の意味での平等。」

### 親への信頼（親を運転席につける）

子供はどんなに虐待されても、親への愛を手放そうとしない。だから親を否定したり、親を引き離したり、あるいは親の代行をするより、親自身が落ち着いて子育てできるような支援するのが理想。

「親への信頼というのは、「親を運転席につける」とよく言われるんですが、「だめだあの親、たばこも吸うし酒も飲むし、どうしようもないわ。」という発想をしない。どんな親にも子育てする力があると信じて、支援していく態度を貫きます。これは本当にすごい。」

### コミュニティオリエンテッド(市民指向)

今までは何かというと、専門家に頼っていた（プロフェッショナルオリエンテッド）。しかしほとんどのケースにおいて、彼らは必ず、家庭の欠点を探そうとするし、第一雇用にお金がかかる。それよりも、当事者の気持ちになれる、理解力のあるボランティアのほうが有効ではないか。

「地域主体—東京から偉い先生を呼んできてというより、地域にもっとすごい人材がたくさんいらっしゃると思うんです。そういう人らでがんがん盛り上がっていきよという考え方です。」

### ストレngthベースドアプローチ(長所に注目する)

欠点をさがしたり足りないものを補ったりする（デフィシットベースドアプローチ）よりも、長所を見つけ、今持っているリソース（持っているもの、素質）に注目し、それを伸ばした方が有効。

「長所に注目する—日本の人はずごく難しい。私達は育ってくる過程で、先生や親に「ここが悪いからここを直しなさい。」「この成績が悪いからもうちょっとがんばりなさい」と言われ続けてきていませんか？自分がやられた事はどうしてもやってしまうんです。実際にやってみると、かなり難しいです。」

### リソースベースド（持っているものを生かす）

プログラムにおいては、自前でできることを考える。支援においても、当事者のリソースを生かしたエンパワーを考える。

「自分の地域にあるもの知っている事を大切に、それを最大限に生かそうという考え方」

### エンパワー

支援に依存させるのではなく、その人自身が自分の力で有意義な人生が遅れるような支援をする。「よく、一生懸命支援をするとお母さん達がお客さんになっちゃって、私達サービスしてるばかりでどうなんだろう、と悩む話を聞くんですが、その人がサービスがなくてもいきいきと暮らせるようにしむけるのが、エンパワーの支援ということです。」

### 完璧な親なんていない

完璧な親なんかいない。いい親、悪い親なんて考え方はナンセンス。いろいろな親がいて、それぞれいいところ悪いところがあり完璧はありえない。子どもも同じという考え方。

「完璧な親なんていないというのはカナダ全体で共有している考えで、どんな親もいい所悪い所があって、いい悪いはないという考え方。」

### 問題対応型から予防、教育型へ

非行などの問題行動が、その幼年期に起因することに注目すれば、問題が起きてから後手後手にまわるのではなく、子どもが生まれる時から、予防的、教育的に対応した方が効果的であり、社会的な費用も抑えられる。

「問題対応型から予防教育型へというのは、顕著な例で、何年か前の新聞に厚生労働省が児童精神科医を増やすというニュースがあったがそれは問題対応型。予防、教育型は、起きる前にフォローし続けていけば、犯罪に至らないんじゃないかという考え方です。」

### 対等で親しい関係

精神医療やカウンセリング、教育相談などのように、お互いをよく知らない間柄、しかも暗黙の上下関係のなかで問題解決するのではなく、まず対等で親しい関係をつくって、その関係の上にとって、相談したり、支援や教育プログラムを提案したりする。

「たとえば、教育相談やカウンセリングでは、カウンセラーは上下関係があるなんて一言も言わないんだけど、相談室に入って「どうぞ」と言われた時点で、なんとなく利用者の方が下のような暗黙の雰囲気があるような気がしませんか？ 対等で親しい関係というのは、そういうのを一切なくして、本当に対等で親しい関係を形作るところから支援は始まるんだという考え方です。」

### 様々な家庭支援職

居場所事業などを手がけるファミリーリソースプラクティショナー、親教育のファミリーライフエドゥケーター、ソーシャルワーク担当のファミリーソーシャルワーカー、ほかにもユースワーカー、コーディネーター、アウトリーチマネージャーなど様々な職種の家庭支援職が存在する。なお、これらの仕事は、保育士、教師とはまったく違う専門性を持つと認識されている。

「様々な家庭支援職の人がいます。親教育中心のファミリーライフエドゥケーター、居場所のスタッフ中心のファミリーリポートプラクティション、ファミリーソーシャルワーカー、コーディネーター、アウトリーチマネージャー、いろんな仕事をしている人達が、みんな力で合わせてやっています。」

(最近カナダに行った支援者の報告です)

スタッフの家族支援に対する考え方が1本筋が通っていて、単なる支援の場の提供者ではなく、親子をまるごと受け入れ、家族の良いところを引き出し、一人一人の親子が、よりよい生活がおくれるように、惜しみなく情報提供し、地域社会とのつなぎ役をになっていました。

100人の親子がいれば、100通りの子育ての方法があってよい。

子育てのやり方を、あれこれと指導するのではなく、その家族のやり方を最大限尊重し、家族が必要としていること(ニーズ)に、どうすればスタッフ(支援者)が答えられるか、常にそう考えているステキな方々にたくさん出会いました。施設のスタッフは、臨床心理士の資格をもつプロから、利用者から採用された元ママさんまで様々ですが、スタッフとして最初に学ぶことは、自分が何かの資格があるとか、子育ての経験があるとか、そういう意識は一切捨てなさい、ということだそうです。

スタッフと利用者(子育て中の親)は、対等な関係であり、利用者は子育ての主体です。そして、子育て中の家族は、社会から助けられる権利があるということを、利用者の親子にまず教えるのです。スタッフは、その親子が地域社会(コミュニティー)にうまく参加できるように、最大限の協力をしていました。(雲雀信子・NPO法人子育てサポーター・チャオ代表)

\*\*\*\*\*

## 付録；活動を維持、発展するコツについて

(ファイリーエデュケーター林まみより) →地域のリソースを生かすたってどうすればいいかわからない、という感じになってはいけないので、老婆心ながら少しだけけど、こういう事なんですよというのを言いますね。

カナダの人ってすごいお金にシビアというか、本当に予算のない中で一生懸命やっていて、表紙に出てきたストアフロントの支援者の人も「次の世代に渡したいんだけど」と言っていて、「ここやりたい人なんていっぱいいるでしょう」と言ったら、「こんな安月給で苦勞の多い仕事をやる若い人なんか誰もいないわよ。」と言っていたのでびっくりしたんですが・・・！！

厳しい状況の中で実はみんなやっていて、本当に工夫してやっています。今の活動を是非皆さんも大切にしてほしいと思います。以下いくつかご紹介を。」

## ● ミッションや目的を設定する

なぜ、自分たちはこのような活動をしているのかを明確にしておき絶えずそこに立ち返る。

ひとつめは、もし今活動なさっている内容があるとしたら、それを自分はなぜやっているのかという事に必ず立ち返ってほしいという事です。私の場合は最初家族の幸せを応援しようということで、ライフワークとして始めたんですけども、今振り返ってみると、今の私の原動力になっているのは、子どもを産み育てるといふ人類の基本的な事をしている人が幸せじゃないというのはおかしいという憤り！！

同じように、障害を持つ子の親だけが、健常児の親に比べてすごく精神的にも物理的にもハードな状況はおかしいという憤りなんです。

## ● 自分たちの力量を確認する

オーバーワークになっては活動は続かないし、あるいはメンバーの特技を自覚せずに、宝の持ち腐れになることもつまらない。有形無形に自分たちの持っているものを確認する。

「自分達に出来る事は何、ついついミッションが高じてくると、あれもやろうこれもやろう、何とか自分の時間を犠牲にしても・・・って。私なんかもさ、パソコンやっていると子どもがよってきても「うるさいな」みたいな目になっちゃって。ある日真ん中の子に「ねえねえお母さん、パソコンやってる時俺にしっしって言うよね。」って言われた！その時やはり「ああー」と思って、人の幸せばかり考えて自分の家族の幸せをないがしろにしたなと思って、すごく反省した事が。その辺のバランスをとって、細く長くやった方がいいんじゃないかと思います。あと自分達のメンバーのできることでできないことを明確にね。」

## ● あらゆる戦略を練る

例えば予算がない、時間がない、理解がない、などで活動が行き詰まった時に嘆かない。それよりも、その難問を乗り越えるために、あらゆる戦略を練って立ち向かう。ただし前向きに明るく。

「やりたいんだけど、何々がねー」「でもね、行政がね」とかいろいろな話を聞くんだけど・・・さ。世の中というのはうまくいかないのが当たり前じゃない？今の状況を冷静に判断して、現状と理想を比べた時にどうすれば近づくかといういろんな戦略を練って、小さな事でもいいと思う。昨日迎えに来てくださった支援センターの方が、子育てサークルリストを作って市町村に配る仕事があるんだけど、当事者の目に付く所になかなか置いてもらえないような気がするという話をしたらしたので、じゃあ穴あけパンチで穴を開けてひもを通して、小さな紙に「母子手帳交付コーナーに置いて下さい」とはさんで市町村に送れば？なんて話で。そんな小さな工夫でも全然違ってくると思うので、無理をしないで出来る範囲で、あらゆる方法を考えてみればいいと。ほんとにさ、いろんな事をしでやっていくことが細く長くの秘訣かなとおもいますよ。」